

マルクス、エンゲルスが基礎づけた科学的世界観の特徴

2011. 7. 7

岡山県労働者学習協会 長久啓太

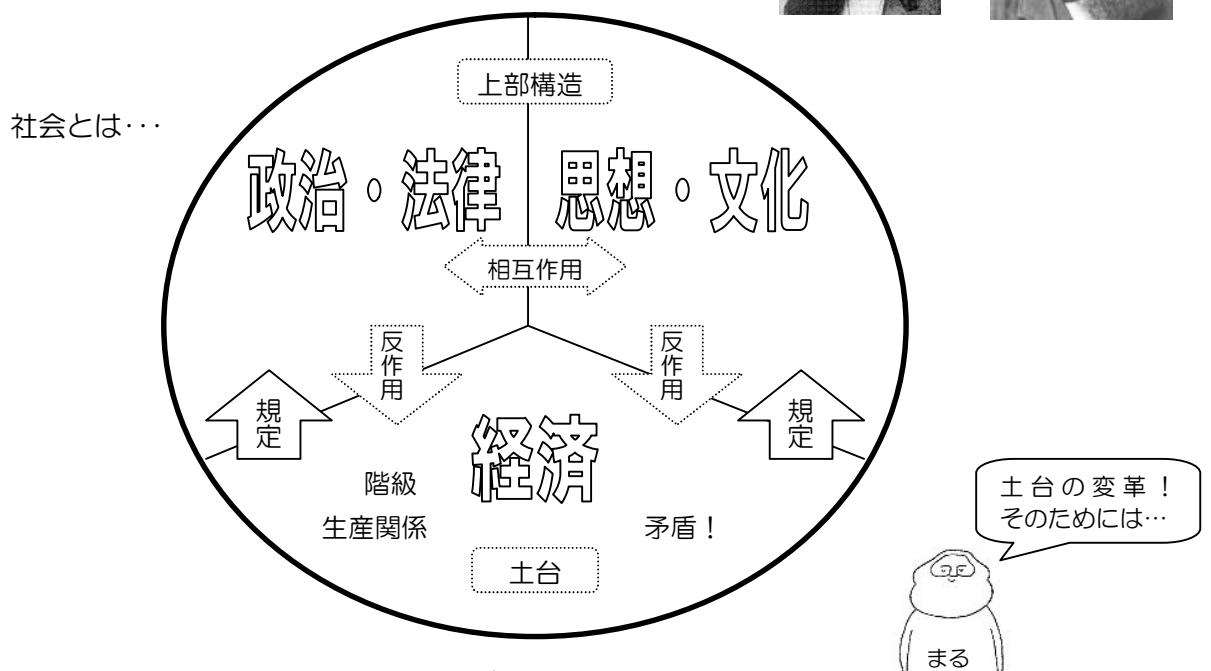
ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

≪ “哲学ものがたり” の流れをふりかえると… ≫

- ①人類最初のまとまった世界観は神話による自然や世界の説明だった（せいっぱい）
- ②紀元前の古代ギリシャでは、民主主義が発達し、学問も花ひらく。そのなかで自然哲学者（唯物論的な）が生れてくる。万物のもとのものは…。観念論の側からのたたかいも。このギリシャ哲学は、その後の哲学者たちにも大きな影響力をあたえ続ける。
- ③封建社会になると、宗教的世界観が権力と結びついて浸透し、哲学的態度（疑ったり、問うたり）は窒息させられていく。ただ、宗教も、歴史の必然として生まれてきた。
- ④14世紀頃から、ルネサンスがはじまる。人間っていいなという見方。また封建制社会の矛盾が大きくなり、資本主義への移行期になると、自然科学の発展が大ききすすむ。コペルニクス、ガリレオ、ベーコン…。
- ⑤資本主義の変革期には、哲学は唯物論的になっていく。イギリスやフランスで哲学が発展していく。フランス革命を思想的に準備した啓蒙思想家たちのたたかい。
- ⑥ただし、当時の唯物論は機械論的な要素をつよくもっていた。それをのりこえていくのが、ドイツ古典哲学。カントやヘーゲル。動的な世界観をうちたてる。
- ⑦観念論的なドイツ古典哲学だったが、ヘーゲルの革新的部分を受けつぐ形で、青年マルクス、エンゲルスが育ち、その弱点を急速に克服していく。

はじめに：マルクスとエンゲルスの哲学の特徴…

ひと言でいえば「変革のための哲学」ということ。



一。科学的世界観の特徴①—唯物論

1. 存在から、ものごとを、ありのままに見る

◇ものの見方の出発点—2つの世界観の対立

* 物資を根源的なものとする立場＝唯物論

* 意識（精神）を根源的なものとする立場＝観念論



ぼくらは唯物論者っていうんだ

* 「物質と意識、どちらが大切か」ということではない

物質とは：私たちの意識とは独立に存在し、私たちの感覚の源をなし、感覚を手がかりとして、認識できるもののこと

意識とは：物質である脳の働き。意識の内容は、外の世界の反映。

* 神話・・・神々の物語だが・・・人間の創造の産物

* 宗教・・・人間の解放、苦難の軽減、幸福の追求・・・労働運動とは別の手段で神（形態はさまざまだが）の存在が前提

* プラトン（イデア）、カント（物自体）、ヘーゲル（絶対精神）など

◇存在（物質的諸関係）が、意識を規定する

「意識が生活（存在）を規定するのではなくて、生活（存在）が意識を規定する」（マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』）

◇ありのままに見る決心（これには努力・たたかいが必要）

「すなわち、現実の世界—自然および歴史—を、どんな先入見的な観念論的気まぐれもなしにそれら自然および歴史に近づく者のだれにでもあらわれるままの姿で、とらえようという決心がなされたのであり、なんら空想的な関連においてではなく、それ自体の関連においてとらえられる事実と一致しないところの、どのような観念論的気まぐれをも、容赦することなく犠牲にしようという決心がなされたのである」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

* でも、このような見方や姿勢を「つらぬく」ことは簡単ではない。

* 観念論的な考え方をするほうが、ある意味ラクな側面がある

- ・これは宿命・運命だから
- ・個人の意識の問題にすべてを解消する
- ・教義に頼って判断する



すべてを疑え！
問うて、考えて。

◇人間の意識活動の過程でも、かならず観念論的な要素が入り込んでくる

* 意識の能動性（思い込み・決めつけ）

* 「なぜ？」「どうして」「もっとよく考えてみよう」とあれこれ努力するより、「どうせこうだろう」と思うほうがラクチン。「ゆとり」がない時には特に注意。

◇唯物論的な見方は、つねにみがかないと錆びつく

* 思い込み、先入観・決めつけとのたたかひのなかにこそ、唯物論はある。

◇集団の力で、個人の「狭い、思い込み・先入観のふくまれた認識」を正していく

* 対象やものごとを多面的にとらえるには、集団での認識が有効な手段となる

* 1人ひとりの認識にはつねに限界があることを自覚することが大事

* したがって、他者の認識から謙虚に学ぶことが必要

* 民主的な討論や、集団的な調査・分析のもとでつくられた目標や方針は、科学的な力をもつ。

【補論一生涯、科学的世界観をみがき続けたマルクスとエンゲルス】

◇2人の世界観をまとまって学べるものは、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』

◇わかりやすく学ぼうと思えば、学習の友社の『新・働くものの基礎講座・哲学』

◇2人の自然科学の勉強ぶりは、不破哲三『「自然の弁証法」—エンゲルスの足跡をたどる』（新日本出版社、1988年）に詳しく紹介されている。

◇マルクスは、『資本論』をつくるさいも、その方法論として、アリストテレスやヘーゲルの研究方法を駆使している。

い〜ばい勉強したんだもん



二。科学的世界観の特徴②—弁証法

1. 世界（自然や社会、そして人間）はどのようなあり方をしているのか？

◇弁証法の見方の基本（これだけでないが）：運動・変化、発展、連関

◇弁証法的でない見方を、形而上学ともいう

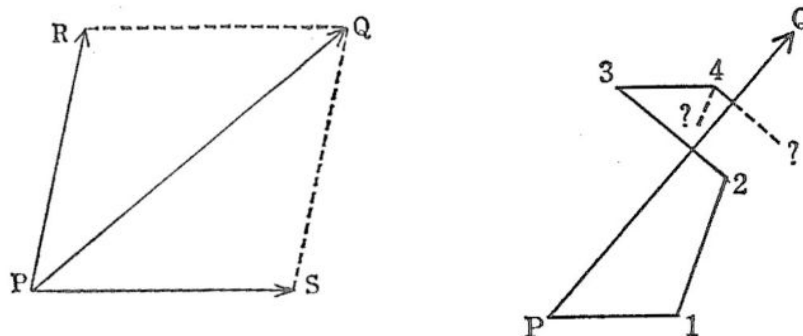
「われわれが自然あるいは人間の歴史あるいはわれわれの精神活動を考察すると、まずわれわれの前にあらわれるのは、連関と相互作用が無限にからみ合った姿であり、この無限のからみ合いのなかでは、どんなものも、もとのままのもの、もとのままのところ、もとのままの状態にとどまっているものはなく、すべてのものは運動し、変化し、生成し、消滅している」（エンゲルス『空想から科学へ』）

「世界をできあがった諸事物の複合体と見るのではなく、諸過程の複合体と見なければならず、そこでは、見かけは固定的な事物も、われわれの頭脳のなかにあるその思想的模写すなわち概念におとらず、生成と消滅のたえまない変化をとげており、この変化のうちでは、どれほど偶然事ばかり目にはいたり、どれほど一時的な後退が生じようとも、けっきょくは一つの前進的發展がつらぬかれているのだという偉大な根本思想」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

* 諸過程の複合体…！

* ひとつの前進的發展がつらぬかれている…！

【補論－3日の中田進講演で反響の大きかった力の平行四辺形の話】



「歴史のつくられ方というのは、多くの個別意志の葛藤のなかから最終結果がいつでも生れてくるものであり、しかもそれらの個別意志はそれぞれまた多くの特殊な生活条件によってそのような個別意志になっているのです。つまり無数の、たがいに阻害し合う力、すなわち力の平行四辺形の無限の集まりがあり、そのなかからひとつの合成力——歴史的結果——が生まれるのであり、それ自身はまた全体として無意識に、また無意志にはたらく力の産物としてみなすことができるのです。なぜならば、個々の一人ひとりの者がもつめるものは、他のそれぞれの者によってはばまれ、そして出て来るものはだれもがもつめなかったものということになるのです。こうしてこれまでの歴史はひとつの自然過程のように経過していますし、また本質的には同じ運動法則にしたがっています。しかし、個々の意志が—そのそれぞれが体質や外的な、最終的には経済的な事情（それ自身の個人的な事情または一般的-社会的な事情）にせまられて、そのもつめるところがきまってくる—そのもつめるところを得られず、溶け合って全体の平均、すなわち共通の合成力が生れるからといって、個々の意志イコール・ゼロとみなすべしなどと考えてはなりません。それどころか、個々の意志はそれぞれ合成力に寄与するのであり、そのかぎりでのなかに含まれているのです」（エンゲルスからヨーゼフ・ブロッホへの手紙、

1890年9月21日、全集37巻）

2. 弁証法的なものの見方を武器に、歴史や社会を分析する

「現在の社会は決して固定した結晶ではなくて、変化の可能な、そして絶えず変化の過程にある有機体」（マルクス『資本論』初版への「序言」）

「弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的である」（『資本論』第2版への「あとがき」）

*ヘラクレイトス（紀元前536～470）の「万物流転」のより豊かな形での復活

◇「どうせ…」というものの見方も、私たちによく入り込んでくる

*木を見て、森を見失う（部分だけをみて全体をみず）—必要な過程だが

「自然をその個々の部分に分解すること、種々の自然過程と自然対象を一定の部類に分けること、生物体の内部をその多様な解剖学的形態にしたがって研究することは、最近400年間に自然を認識するうえでおこなわれた巨大な進歩の根本条件であった」
（エンゲルス『空想から科学へ』）

「しかし、それは同時に自然物や自然過程を個々ばらばらにして、大きな全体的連関の外でとらえる習慣、したがって、それらを運動しているものとしてでなく、静止しているものとして、本質的に変化するものとしてでなく、固定不変のものとして、生きているものとしてでなく、死んだものとしてとらえる習慣を残した。…この見方が自然科学から哲学へうつされたことによって、それは最近数世紀に特有な偏狭さ、すなわち形而上学的な考え方をくりだした」
（同上）

「形而上学者にとっては、一つの物は存在するか、存在しないかである。一つの物がそれ自身であると同時に他のものであることはできない。肯定と否定は絶対的に排除しあうし、同様に原因と結果は硬直した相互対立をなしている」
（同上）

*現象にとらわれて、本質を見失う

*結果だけに目を奪われ、原因を探求する姿勢が弱い

*過去の経験を、時、所、条件からきりはなして固定化し、その尺度ですべてをはかろうとする（ラクだから）。しかし、現実“つねに”変化している。

社会も唯物論と弁証法で分析！



三。科学的世界観の特徴③—史的唯物論

1。社会は変化し、発展してきたし、その法則性がある

◇こういう考え方は、ずっと昔からあったわけではない

*社会は1人ひとりの人間の意志で動いているものだから、法則性などない。

*あるいは、神が人間社会をつくったという宗教的社会観

*いまの資本主義社会が人類社会の最高の到達点である、とか

*英雄・豪傑・偉人たちの活躍。国王や皇帝の業績などを原動力としてみる見方も。

・日本の戦前の歴史教育は、社会の構造やしくみぬきの、時代区分だった
天皇の代で時代を区分したり、首都がどこにあったかで分けていた。

◇史的唯物論の確立……マルクスの功績

*社会は、これまでも法則性をもって変わってきたし、これからも変わってゆく。

*私たちが生きている資本主義社会は、人類の歴史の、ひとつの段階にすぎない。

*その社会を変えていく原動力やしくみ、その担い手を明らかにした。

2. 社会をみる見方の核心的なポイント

【①社会の土台は、人間の経済生活にある】

◇生産活動がなければ、社会は成り立たない

*どんな社会でも、衣食住など、人間生活に必要な物資やサービスを生産する活動を抜きにしては、社会の生活も個人の生活も成り立たない。

*そのような必要な物資やサービスを、どのように生産しているのか。そのなかで人間がどのような関係をもつのか、そこに、歴史発展の視点をおいた。

◇経済的土台のうえに、政治や思想・文化が展開される

【②経済関係の段階的な発展が歴史の時代を区分する】

◇生産力の発展と、生産関係に注目する

*人間が生産活動のなかで、取り結ぶ社会関係（生産関係）は、歴史のなかで大きな変革をくりかえしてきた。生産をめぐってのこの社会的関係（生産・分配・交換・消費）の特質こそが、歴史の諸時代を区分してきた。

*その生産関係を変えていく原動力は、生産力の発展。しかし、生産関係が自動的に変化していくわけではない。

◇生産関係をみるポイントは、生産手段の所有関係

*生産手段とは

- ・労働手段：道具や機械、装置など
- ・労働対象：天然資源、原料、材料など

労働手段+労働対象 → 生産手段といえます

◇その生産手段を、だれが、どれだけ持っているかが、ポイント

*人類社会の主な社会発展区分

- ・原始共産制社会→生産手段はみんなで所有
- ・奴隷制社会→主な生産手段は奴隷主がもつ
- ・封建制社会→主な生産手段は封建領主がもつ
- ・資本主義社会→主な生産手段は資本家がもつ
- ・未来社会は・・・

資本主義は永遠
じゃないよ！



【③社会を動かす主役は「階級」という人間集団】

◇階級とは

*生産手段の所有の有無、その程度、によって区別される社会的な集団のこと。

*富の分配も、とうぜん区別される。

◇生産力の発展が、生産関係と矛盾するようになる

*その矛盾は、階級間のたたかい（階級闘争）という形であらわれる

*その「たたかいの方法」も社会の発展段階によって異なる

◇そのたたかいを原動力として、社会は変革されていく

次回（最終回。7月14日）は、「時代の変革者として－『世界観』をみがきつづけて」